

「どっちつかず」の世界としてのナルニア

——『ライオンと魔女と衣装箆筒』を中心に——

加藤 佐和子

序 論

「衣装箆筒の扉の向こうに別世界が広がっている」—— C. S. ルイス (Clive Staples Lewis) の『ナルニア年代記』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-1956) 第一作『ライオンと魔女と衣装箆筒』(*The Lion, the Witch and the Wardrobe*) の冒頭に描かれるこの描写は、ファンタジー児童文学における最も象徴的な場面の一つとして広く知られている。実際、ルイスの故郷ベルファストに建てられた銅像は、ルイス自身が衣装箆筒の扉を開けて覗き込む姿で造られており、この「扉」のイメージがルイス自身の代名詞となっていることを物語っている。しかし、『ナルニア年代記』全七巻を通して描かれる世界間移動の手段は、衣装箆筒に限らない。駅のホーム、絵画、裏庭の扉、指輪、列車事故など、実に多様な「扉」が登場し、それぞれが別世界への通路として機能している。さらに、ナルニア内部にも地下のビスム国 (the land of Bism) や東の果てのアスラン (Aslan) の国など多数の別世界を持つ。

別世界ファンタジーとして大きな功績を果たした『ナルニア年代記』であるが、従来の研究は、作品に聖書との呼応関係や、神学的思想など宗教的意味合いを見出すことに焦点を当ててきた。また、『ナルニア年代記』に限らず、ルイスのフィクションについての研究は、彼の作品すべてにキリスト教的基盤があるとする見方から始まるものが主流である。また、児童文学としての側面からは、子どもたちの成長や冒険の意味を探る研究も数多く蓄積されている。しかしながら、これらの先行研究は、現実世界と別世界ナルニアを二項対立的に捉え、子どもたちがその境界を越えて成長するという図式を前提としているものが大半を占める。

こうした従来の解釈に対して、本論文は根本的な問い直しを試みるものである。はたして『ナルニア年代記』における「別世界」は、現実に対立する明確に区別された空間として理解されるべきなのだろうか。

本論文ではまず二項対立的世界観の限界を指摘した上で、「別世界」概念の理論的再検討を行う。次に、『ライオンと魔女と衣装箆筒』を中心とした具体的テキスト分析により、衣装箆筒を通じた世界間移動の描写を詳細に検討し、ナルニアの流動的性格を明らかにする。

I. 「どっちつかず」の世界 — 『ナルニア年代記』における別世界概念の再検討

『カスピアン王子』(*Prince Caspian*)の冒頭で、語り手は物語の始まりである『ライオンと魔女と衣装箆筒』を振り返って、ナルニアを「とある別世界」(a different world)と、別世界の複数性を示唆する形で言及する (“[t]hey [Pevensie children] had opened the door of magic wardrobe and found themselves in a quite different world from ours, and in that different world they had become Kings and Queens in a country called Narnia”) (317)。また、『銀の椅子』(*Silver Chair*)では、ユースタス (Eustace) がナルニアを「この世界の外」と表現している (“[c]ould you believe me if I said I’d been right out of the world — outside this world — last hols?”) (551)。さらに、ジル (Jill) は現実世界を「別世界」(another world)と言及する (“We come from another world”) (630)。

そもそも「別世界」(other world)とは、OEDによれば、「超自然的な世界」、そして「異なる、一風変わった、あるいは馴染みのない世界；想像上の、または幻想的な世界。特に(ファンタジー小説において)既知の世界と並行して、またはそれに加えて存在する世界で、妖精やその他の超自然的な生き物が住み、超自然的な特徴を持つ」世界であると定義されている (“A different, strange, or unfamiliar world; an imaginary or fantastic world, spec. (in fantasy fiction) a world existing alongside or in addition to the known world, typically inhabited by fairies or other supernatural creatures and having supernatural characteristics”)。言い換えれば、「別世界」とは、地理的にも、体系的にも、既知の現実世界とは一線を画す世界とされていることになる。

また、ファンタジー文学に描かれる「別世界」は、現実世界に対する批判としての機能を持つと見なされている。例えば、W・R・アーウィン (W. R. Irwin) は現実からは区別されるこの別世界について、「『現実』の外側にあるだけでなく、『現実』に意図的に反抗」しているものとしている。

The test of difference is more than non-correspondence; a matter is within the range of the fantastic if it is judged, whether on the basis of knowledge or of convention, to be not only outside “reality” but also in knowing contravention of “reality.” Thus within the concept of the fantastic is a competition for credence in which an assertive “antireal” plays against an established “real.” (8)

ここでは、別世界が、確立された現実に対して対抗する「反現実」(antireal)として捉えられている。

しかし、別世界を二項対立的に読み解くことには疑問も呈されてきた。キャサリン・ヒューム

(Kathlyn Hume) はファンタジーにおける別世界は筆者が定めた現実世界の条件によって左右される、流動的なものであることを指摘している (part I:1)。ローズマリー・ジャクソン (Rosemary Jackson) は現実と非現実の間に構築された「幻想的で幽霊的な領域」(the spectral region of the fantastic) を、「近軸領域」(paraxial area) と呼称した。「近軸」(paraxis) という用語は光学の専門用語であり、「近軸領域」とは屈折後に光線が一点に収束するように見える領域を指す。この領域では物体と像がぶつかり合うように見えるが、実際には物体も再構成された像も真に存在はせず、何も存在していない。この近軸領域を、ジャクソンはファンタジーに見出した (part 1:2)。ジャクソンの概念も、「現実 vs 別世界」という二項対立的な考えから自由になってはいないものの、その間にあるどちらにも属さない空間に注目している点では異なっている。どちらにも属さない宙吊り状態にある空間は、従来の固定的で二項対立的な別世界観に依拠しない、新たな視点を提供するものである。複数の世界から成り立っている『ナルニア年代記』における別世界ナルニアも、二項対立的な世界観に縛られない空間として考察されうるのではないか。

『ナルニア年代記』の中には、大きく分けて五つの世界が存在するが、子ども達がかつと住んでいた現実世界 (イギリス) も、別世界ナルニアも、それらの世界は全て「まことの世界」の影であったことが物語の最後に明らかになる (“[i]t [Narnia] was only a shadow or a copy of the real Narnia which has always been here and always will be here: just as our own world, England and all, is only a shadow or copy of something in Aslan's real world”) (759)。デイゴリー (Digory) はこの説明に続けて、「これは全てプラトンが言ったことだよ」 (“It's all in Plato”) と言う。この思想は、『共和国』第七書にあるソクラテスとグラウコンの洞窟にいる囚人たちについての会話を元にルイスが導き出した、「移ろいゆく、変化する影の世界、あるいは影の国とルイスが呼ぶ世界の背後に、不変なる真実がある」という考えを表現している (Lancelyn Green and Hooper, ch.11)。プラトンの言う「イデア」、つまり究極的实在であり永遠の世界が存在するという世界構造が示されることによって、この物語が現実世界と別世界という二項対立で終わることない世界観に依っていることが確認できる。

さらに、『銀の椅子』には、どの世界を現実世界とするか問うことそのものがナンセンスとなる場面がある。ナルニアを訪れたジルとユースタスは、ナルニアの民であるパドルグラム (Puddleglum) と共に地下の世界を訪れ、そこで魔女と対峙する。魔女は彼らに魔法をかけ、地下の世界以外に世界などありはしないと語り聞かせる。

“I see,” she said, “that we should do no better with your lion, as you call it, than we did with your sun. You have seen lamps, and so you imagined a bigger and better lamp and called it the sun. You've seen cats, and now you want a bigger and better cat, and it's to be called a lion. Well, 'tis a pretty make-believe, though, to say truth, it would suit you all

better if you were younger. And look how you can put nothing into your make-believe without copying it from the real world, this world of mine, which is the only world. (632)

自分の世界こそが本物／現実 (the real world) であると嘯く魔女に対して、子どもたちはナルニアが妄想ではないことを証明しようとする。ナルニアにおいて子どもたちと行動を共にするパドルグラムは以下のように主張する。

Suppose we have only dreamed, or made up, all those things—trees and grass and sun and moon and stars and Aslan himself. Suppose we have. Then all I [Puddleglum] can say is that, in that case, the made-up things seem a good deal more important than the real ones. . . . I'm on Aslan's side even if there isn't any Aslan to lead it. I'm going to live as like a Narnian as I can even if there isn't any Narnia. (633)

この時、どの世界が「現実」であるか、その境界線は非常に曖昧だ。魔女と子どもたちの問答、そしてパドルグラムのスピーチは、数多の「現実」がある可能性を示し、その境界線は実際に理性に依ってのみ引かれるものではないことを示している。すなわち、どの世界を本物／現実 (real) とみなすかは、その視点の持ち主に委ねられていると言える。個人の価値観や信念が重んじられており、その区分の正誤あるいは真偽は二の次とされる。

ここまで見てきた中で、別世界ナルニアの特徴として顕著なのは、その属性の曖昧さである。子どもたちはナルニアを現実ではない「別世界」として認識しつつも、その一方でその世界を幻想だとは捉えていない。実際、ナルニアははっきりと実在性を持つ世界として描かれている。例えば、『カスピアン王子』の最後の「新しい懐中電灯、ナルニアに置いてきちゃった」(“I've left my new torch in Narnia”) (418) というエドモンド (Edmund) の言葉は、ナルニアがものを置き忘れてくることのできる、しっかりと実在性を持つ世界であることを示している。もし、ナルニアが夢であったり、概念だけの世界であったなら、懐中電灯は現実世界にとどまったままのはずだからである。しかしながら、物語の外から見れば、物語の中の現実世界もナルニアも、まことの世界の影にすぎない。別世界ナルニアという空間には、常に定義され得ない曖昧さがある。

このような空間は、ヴィクター・ターナー (Victor Turner) がリミナリティ (liminality)、あるいはリミノイド・スペース (the liminoid space) と呼称したものと特徴を同じくしている。リミナリティという概念は1909年に文化人類学者アーノルド・ヴァン・ヘネップ (Arnold van Gennep) によって生み出された。ヘネップは、ある社会的階級から別の社会的階級へ、あるいは人生のある段階から別の段階へ移行する「通過儀礼」中の状態を三つの段階に分け (「分離」、 「移行」、 「再統合」)、元々属していた社会規範から切り離された、「どっちつかず」の、あるいは

分類を試みてもどちらとも言う事のできない、曖昧な中間段階を指してこの概念を提唱した。1960年代にヴィクター・ターナーが個人が帰属を失い宙吊りになる「どっちつかず」の段階について重点的に再検討、拡張を行なった。

ターナーは *The Ritual Process: Structure and Anti-structure* で、伝統的な通過儀礼における義務的で集合的な「リミナル」概念を発展させた、現代社会における任意的で個人的な「リミノイド」(liminoid) という概念について述べた (Bousquet 3)。アンソニー・パヴリク (Anthony Pavlik) はリミノイド・スペースについて以下のようにまとめている。

In a liminoid space, protagonists must manufacture, produce, and ultimately perform the space whilst, at the same time, the space acts upon the performance of the protagonists by and through the character and nature of its constructedness; how it is constructed will broadly suggest what operations are possible within it. (240)

パヴリクによれば、登場人物たちはリミノイド・スペースへと移動するが、その空間を創造しているのは主人公たち自身であり、それと同時に主人公たちの行動はその空間の影響を受けるとされている。別世界ファンタジーに置き換えれば、別世界と子どもたちは相互に影響を与えあい、世界を構築していくことになる。では、『ナルニア年代記』を読み解く際、二項対立的に存在する現実世界と別世界の間を行き来し、その枠組みの中で、外部からの影響を一方的に受けて成長する物語としてではなく、自ら新たに構築する世界との出会いの中で成長する物語として捉える必要があるのではないか。

このような再解釈は、子どもたちが行う「移動」についての再検討を促す。次章では『ナルニア年代記』の『ライオンと魔女と衣装箒箆』における移動を詳細に考察する。

II. 相対的「境界」

『ライオンと魔女と衣装箒箆』は、ペベンシー (Pevensie) 兄妹がロンドン大空襲を避けて疎開してきた、という語り手の言葉から始まる。

Once there were four children whose names were Peter, Susan, Edmund and Lucy. This story is about something that happened to them when they were sent away from London during *the* war because of *the* air-raids. They were sent to the house of an old Professor who lived in the heart of the country, ten miles from the nearest railway station and two miles from the nearest post office. (111) (斜体は筆者)

引用中に斜体にして示したように、戦争 (war) や空襲 (air-raids) の冠詞が「あの」(the) で表されることで、読者は直接的に、生々しい実体験として肌に残っている第二次世界大戦を思い出すことになる。ピーター・J・シェイクル (Peter J. Schakel) は1950年に出版されたこの作品を読む子ども達が、ロンドン大空襲を直接の記憶として保持している、あるいは周りからその話を聞いている可能性が高いことを指摘して、おとぎ話の典型的な始まりである “[o]nce upon a time” を想起させる書き出しとなっているが、この物語の “once” は、そのような曖昧な時間ではなく、はっきりと1940年から41年にかけてのロンドン大空襲の時期を指していると述べる (39)。子どもたちの疎開の描写の背景には、ルイスが疎開児童を実際に受け入れた事実がある (*Letters* 414, 417)。第一作目の『ライオンと魔女と衣装箆筒』が刊行されたのは1950年だが、1939年には物語の断片を書いていたことがエッセイから明らかになっている (“It all Began with A Picture . . .” 67-68)。

1939年は、ドイツへの宣戦布告を目前に、イギリスで集団学童疎開「パイド・パイパー作戦」(Operation Pied Piper) が決行された年である。この作戦に則って、9月1日から4日にかけて、150万人以上が公共交通機関で都市から地方へ移動した (Huxford)。疎開の対象となったのは小・中学校の生徒、幼児連れの母親、妊娠中の女性、視覚障害を持つ成人などであった (Engelstad)。生徒たちは教師に引率され、行き先を知らされることなく出発した。疎開者用に集合住宅的な施設も作られたものの、生徒たちの受け入れ先として最も多かったのが、個人宅であった (川端 245)。

物語でも、子どもたちが疎開した先は、田舎に住む老教授の屋敷である。ロンドンという都市部から来た子どもたちにとっては、田舎の風景そのものが「別世界」であっただろう。また、この屋敷は歴史的に価値のあるものであるとされ、さまざまな逸話も伝わっており、名所案内にも載っているほどとされている (CN 132)。子どもたちの疎開の背景には「空襲」という、全てを無差別に破壊する攻撃があったことを考えると、多くの歴史的出来事を経てなお現存しているこの屋敷はそれだけで非日常を感じさせるものであったはずだ。物語の中では、子どもたちの「現実」あるいは「日常」は危機的な状況にあるが、屋敷はそのような状況からは隔絶された「別世界」なのだと言うこともできる。子どもたちの「疎開」という「移動」無しには、別世界ナルニアの発見も無かった可能性も考慮に入れれば、物語の冒頭の疎開は、現実世界の中での移動でありながら、すでに世界間の移動としての性質を帯びている。

このような馴染みのない「別世界」としての屋敷に入った子どもたちは、広大な屋敷を探検する。あちこちの部屋の扉を開け、それぞれの部屋を見て歩く、という「移動」の最中に、ナルニアとの初の邂逅が起こる。がらんとした空き部屋に置かれた衣装箆筒に、末っ子のルーシー (Lucy) だけが興味を持ち、扉に手をかけたところ、当然鍵がかかっていると思われた扉が簡単に開いた。衣装箆筒の中には毛皮の外套がたくさんかかっており、毛皮の感触が好きなルーシー

は、毛皮に顔を擦り付けるようにして箆筒の中に入っていった。すぐに突き当たると思っていた背板はなく、箆筒の暗闇の向こう側に、小さな光が見えた (she saw that there was a light ahead of her; not a few inches away where the back of the wardrobe ought to have been, but a long way off) (113)。ルーシーはこの箆筒に入る際に、扉を開け放したままにしているので、背板がなくなったことにより、この瞬間の衣装箆筒は「扉」というよりも「通路」となっており、境界としての機能は持ち合わせていない。「通路」を覗けばナルニアの森の中からも、昼間の光の差す空き部屋を見ることができるといふ非分断性が「戻りたかったらいつでも引き返すことができる」と、ルーシーに森を進む勇気を与えた。ルーシーは光源に向かって10分ほど歩き、夜の森の中に立つ街灯を発見し、その下でフォーン (faun) のタムナス (Tumnus) に遭遇する。タムナスの「あなたはイブの娘さんですか？」 (“should I be right in thinking that you are a Daughter of Eve?”)、「人間ですよ？」 (“[y]ou are in fact Human?”) (115) という問いかけと、それを受けたルーシーが戸惑う場面は、ナルニアの別世界性を感じさせる仕掛けとなっている。現実世界において、種族を確認されることはなく、この問いかけによって、ナルニアの住民との種族的差異があることが婉曲的に強調されている。また、フォーンはローマ神話のファウヌス (Faunus)、ギリシア神話の牧羊神パン (Pan) に相当するが、ジョゼフ・キャンベル (Joseph Campbell) はパンを「境界を越えたあたりに住む最も有名な存在」 ([t]he Arcadian god Pan is the best known Classical example of this dangerous presence dwelling just beyond the protected zone of the village boundary (81)) として挙げている。つまり、現実世界と別世界の境界が物理的には存在しない中で、フォーンのタムナスとの出会いを通して、ルーシーが別世界へと足を踏み入れたことが示唆されているのである。

続いて、次男のエドモンドがナルニアへと足を踏み入れる。かくれんぼの最中に、衣装箆筒のある部屋へと向かうルーシーを見かけたエドモンドは後を追う。扉の開いた衣装箆筒を見たエドモンドは、ルーシーが中に入ったことを確信し、意地悪をしようと自らも箆筒に入りながらドアを閉め切ってしまう。

He jumped in and shut the door, . . . He had expected to find her in a few seconds and was very surprised when he did not. . . [H]e could not find the door either. . . [H]e saw a light. “Thank goodness,” said Edmund, “the door must have swung open of its own accord.” He . . . went towards the light, which he thought was the open door of the wardrobe. (122)

扉を閉め切ってしまったことにより、「通路」を覗き、現実世界の存在を確かめることは不可能である。しかし、すぐに後を追ってきたエドモンドが追いつけなかったことから、ルーシーが前回のよう振り返って現実世界の存在を確認することなく、別世界の中へと入っていったこと

が窺える。そしてエドモンドもまた、ルーシーの後を追って、振り返ることなくナルニアへと入って行く。現実世界から別世界への移動に物理的にも心理的にも障害はない。ナルニアへと進んだ先で、エドモンドが出会ったのは「白い魔女」(the White Witch)であった。魔女は一見人間に見えるが、実際には魔神 (Jinn) と巨人 (giants) の子であり、「人間の血は一滴も入っていない」(“there isn't a drop of real human blood in the Witch”) (147)。魔女から自分の正体について畳み掛けるように詰問され、エドモンドは面喰らって立ちすくむ (“Do you mean you are a Son of Adam?” Edmund stood still, saying nothing. He was too confused by this time to understand what the question meant’) (124)。この描写からは、意図せず越境したことを突きつけられたことへの混乱が読み取れる。

ついに四兄妹が揃ってナルニアに入った際には、衣装箒笥の扉は開け放たれるのでも閉め切られるのでもなく、薄くだけ開けられている (“Peter held the door closed but did not shut it . . .”) (133)。ピーター (Peter) とスーザン (Susan) にとって、ナルニアの森は予想外のものではない (“[w]hy, I do believe we've got into Lucy's wood after all”) (134)。目の前の「森」について、すでにルーシーから聞いていた彼らは「通路」越しに、現実世界を振り返ることはせずに進んで行く。描かれるのは、この世界を探検する好奇心のみで、躊躇いはない (“And now,” said Susan, “what do we do next?” “Do?” said Peter, “why, go and explore the wood, of course”) (135)。ピーターとスーザンにとって、別世界ナルニアとの出会いは、現実世界でルーシーから話を聞いた時に既に行われていた。当初、ピーターたちはルーシーの「森」の話信じず、「作り話をしている」 (“[s]he's just making up a story for fun”) (120) と断じていた。しかし、ルーシーが頑なにナルニアは本当にあるのだと言って譲らないので、彼女の頭がおかしくなってしまったのではないかと不安や混乱を覚える。ルーシーは手に負えない (“[i]t's getting beyond us”), 未知なる存在となり、彼らは屋敷の主人である老教授に相談に行く。教授はルーシーは正気であることを受け合うと同時に、別世界がそこら中に存在することは論理的に考えて何らおかしいところはない、と説く。 (“But do you really mean, sir,” said Peter, “that there could be other worlds—all over the place, just round the corner—like that?” “Nothing is more probable,” said the Professor, . . .”) (132)。老教授の言葉は、境界という観念すら疑わしいことを示唆している。「別世界」との邂逅は、越境という行為そのものよりも、むしろ、よく知っていたはずの妹が未知なる存在となったことへの戸惑いにこそよく表れている。

ここまで、『ライオンと魔女と衣装箒笥』における現実世界から別世界ナルニアへの物理的な移動と心理的な変化への分析を通して、世界間の「境界」について考察を行なった。衣装箒笥の扉の開き具合の描写からは、現実世界と別世界の境の曖昧さが読み取れる。開いていればナルニア側から目視で現実世界を確認できる「通路」となるが、完全に閉めたとしてもナルニアとの行き来が不可能になるというわけではない。別世界であるナルニアと現実世界の繋がり、は、「扉」

の開閉に左右されることはなく、ゆえにその境界も確立されたものだとは言えない。そして心理的な変化の面からは、「別世界」との出会いが、物理的に分断している何かを越えた際に起こるだけではなく、その境界の向こうへ「移動」し、その中での出会いによって自らが今まで帰属していた社会から切り離されていることを認識した瞬間に起こることが明らかとなった。別世界との邂逅は、物理的移動より、むしろ認識の変化として描かれている。つまり、現実世界と別世界の間にある「境界」の相対性が示唆されているのである。

Ⅲ. 相互作用する子どもたちとナルニア

現実世界からナルニアへの移動は、衣装箆筒の中で手探りをしている時間が必ず含まれていることから、この移動が瞬間的なものではないことは読み取れるが、空間的な分離はなく、目視できる程度には近くに存在していることもまた確かである。この近接性ゆえに、ルーシーが初めてナルニアに足を踏み入れた当初訝しんだのは「どうして森の中に街灯が立っているのか」ということであった。訝しんでいるのはあくまで街灯の異質さのみであり、「森」を別世界としては認識していなかったことが読み取れる。ルーシーに「森」が現実世界とは異なる場所だと認識させるきっかけは、フォーンのタムナスと出会い、自己紹介を交わした中にある。

“Narnia? What is that?” said Lucy.

“This is the land of Narnia,” said the Faun, “where we are now; all that lies between the lamp-post and the great castle of Cair Paravel on the eastern sea. And you — you have come from the Wild Woods of the West?”

“I — I got in through the wardrobe in the spare room,” said Lucy. . . . “It’s only just back there — at least — I’m not sure. It is summer there.” (115)

自分たちが今いる場所はナルニアという国である、と目の前のフォーンに言い切られて、ルーシーは戸惑っている。タムナスによるナルニアの説明は明快であり、その空間が巨大であること、また国として歴史がある、確立された場所であることに彼が自信を持っていることを印象づける。それに対して、ルーシーによる現実世界に関しての説明はおぼつかない。ルーシーの説明の心許なさは、この場合の「現実世界」が、ルーシーにとってはいわば「別世界」である疎開先の屋敷であることが影響していると考えられる。ルーシーは前日の夕方この屋敷に着いたばかりであり、屋敷の場所も、屋内構造も理解していない。ゆえに先ほどまで姉と一緒にいた空き部屋に言及するほかないのである。この描写は、『ナルニア年代記』において「世界」が登場人物たちが体験した範囲で構築されることを示唆している。

ナルニアから戻ってきたルーシーは姉に衣装箆筒の中で見たものについて次のように語る。

“There’s a wood inside it, and it’s snowing, and there’s a Faun and a Witch and it’s called Narnia” (120). 雪に覆われた森、フォーン、そして誘拐を命じていたという「魔女」など、ルーシーが実際に目にしてきたもの、あるいは体験したものが言及されている。注目すべきは、ルーシーがナルニアを「森」と表現していることである。ルーシーがタムナスと共に歩んだのは森の中であり、彼女が訪れていない、森を抜けた先の情報は含まれていない。この時点でのナルニアは、ルーシーが移動した範囲で得た情報によって構成されていると言うこともできる。そしてエドモンドに白い魔女が森を抜けた先にある魔女の館を示して見せた後に、子どもたちの行動範囲が森の外へと広がっていくことから、ナルニアは実際に体験された範囲で構築されていると考えられる。そもそも別世界ナルニアそのものが、他の兄妹が衣装箆筒に興味を持たず、扉を開こうとしなかった中で、ただ一人ルーシーが扉を開いたことによって「発見」されたことを考慮すれば、ナルニアが子どもたちとの交流によって構築されるというこの見方は妥当なものと言える。

子どもたちの移動がナルニアを構築するのと同時に、ナルニアでの冒険は彼らに精神的な成長を、あるいは自己改革を達成させる。子どもたちは別世界ナルニアで王や女王として政治を行い、成熟した姿を見せる。しかし、現実世界へ帰還すると元の子どもの姿に戻っている (“the next moment they all came tumbling out of a wardrobe door into the empty room, and they were no longer Kings and Queens in their hunting array but just Peter, Susan, Edmund and Lucy in their old clothes”) (196)。また、『ライオンと魔女と衣装箆筒』の次巻『カスピアン王子』の冒頭には新学期に不安を覚える、年相応の子どもたちが描かれている (“now when they would be saying goodbye and going different ways so soon, everyone felt that the holidays were really over and everyone felt their term-time feeling beginning again, and they were all rather gloomy and no one could think of anything to say”) (317)。現実世界へと帰還した子どもたちには、王や女王として振る舞っていた面影は無く、まるで前巻での経験がリセットされたかのように見える。しかし、それは外面的なものに過ぎない。兄妹が再度ナルニアへと足を踏み入れると、ナルニアの空気が作用して、かつての王や女王の力を取り戻す (“the air of Narnia had been working upon him ever since they arrived on the island, and all his old battles came back to him, and his arms and fingers remembered their old skill”) (364)。また、冒険の道中で、エドモンドは兄妹がルーシーの言うことを信じなくても自分は信じる、と言い切る (“When we first discovered Narnia a year ago . . . it was Lucy who discovered it first and none of us would believe her. I was the worst of the lot, I know. Yet she was right after all. Wouldn’t be fair to believe her this time?”) (374)。この言葉は前巻で「正義の君」と呼ばれるほどに深められた思慮深さ (“Edmund was a graver and quieter man than Peter, and great in council and judgement. He was called King Edmund the Just”) (194) が、子どもの姿に戻ったエドモンドの中に

根付いていることを示している。

そして、『カスピアン王子』に続く『夜明け丸の航海』(*The Voyage of the Dawn Treader*)では、現実世界での水泳経験がナルニアでの冒険の始まりで活かされる(“Lucy thanked her starts that she had worked hard at her swimming in the summer term”) (428)。この描写は、水泳を習得したことが、未開拓であったナルニアの海が冒険の舞台となることに繋がっている、すなわち子どもたちの経験によってナルニアが構築されることを示唆している箇所であると同時に、現実世界と別世界は、全く別々の存在ではなく、子どもたちにとっては分断されていない、一貫した場所であることを示す箇所でもある。それぞれの世界での成長が、一人の人格の中では時系列に直線的に繋がっているからである。

以上を受けて鑑みれば、ナルニアは、「扉」など、何らかの境界線によって仕切られた先にある世界として捉えられるほど単純なものではない。登場人物たちが実際に足を踏み入れて体験することによって、絶えず生成される流動的空間であり、ナルニアと子どもたちは双方向に繰り返し影響を与え合っている。さらに、現実世界と別世界ナルニアは、子どもたちにとっては目の前に広がる「世界」という役割として同一のものであり、その「世界」での経験と成長は、子どもたちの人格の中で一元的に蓄積されていく。

結 論

ここまで、『ナルニア年代記』における「別世界」を、これまで理解されてきたような、現実世界に対立する固定的で明確に区別された空間とする見方に囚われることなく再検討してきた。

本論文では、ナルニアが持つ別世界の流動性を三つの面から確認した。第一に、別世界概念の曖昧性である。物語には複数の別世界が存在し、またナルニアは夢や幻想ではなく物理的に実在性を持っているが、最終的にはそれら全てが「まことの世界」の影にすぎなかったことが明かされる。このことから、ナルニアが別世界と現実世界という二項対立的な構造を超越していることが読み取れる。また、『銀の椅子』における魔女と子どもたち、パドルクラムの間答は、どの世界を「現実」とみなすかは視点の持ち主に委ねられており、その区分の正誤や真偽は重要視されていないことも明らかとなった。第二に、「別世界」の相対性である。物語は子どもたちの疎開から始まるが、この現実世界内での移動がすでに世界間移動の様相を帯びている。この二重の移動の構造は、「別世界」の定義の恣意性を浮き彫りにしている。また、衣装箆の扉は物理的な境界でありながら、その開閉状態は世界間移動の可否には影響しない。別世界への「越境」は、物理的な移動よりも、むしろ種族的な違いや世界認識の差異を通して認識的な変化が起こった際に行われる。第三に、世界構築の双方向的性格である。別世界はあらかじめ完成された空間として存在するのではなく、登場人物たちの移動と体験、その共有を通じて絶えず生成・再構築される。そして、その地での成長は、子どもたち一人ひとりの人格の中で直線的に繋がっている。す

なわち、現実世界と別世界は全く別々の存在ではなく、目の前にある「世界」として同一の、一元的な存在として捉えられるのである。

このような理解は、『ナルニア年代記』を世界認識の複数性と流動性を探求する現代的なファンタジーとして再評価する視点を提供する。子どもたちは分断された二つの世界を移動するのではなく、自らの体験によって新たな世界を創造し、同時にその世界との相互作用を繰り返し経験しながら変容していく。

現代のグローバル社会においては、国境、そして文化的境界を超えて「移動」する経験はますます一般的になっている。文化そのものの移り変わりのスピードも増しており、多くの人々が、自らが帰属する「世界」が変化していく様を経験している。『ナルニア年代記』に描かれる流動的な別世界と、子どもたちがその世界で生き抜く様子は、21世紀の読者にとって、世界との向き合い方に新たな視座を提供するものだと言える。

引用文献リスト

- Bousquet, François., et al. "The Difficult Integration of Liminal Individuals." *M@n@gement*, Nov. 2021, https://www.researchgate.net/publication/356556525_The_difficult_integration_of_liminal_individuals#pdf12
- Campbell, Joseph. *The Hero with a Thousand Faces*. Princeton UP, 1968.
- Engelstad, Linda Yvonne. "Operation Pied Piper: 85 Years Since the Evacuation of Britain's Children – 1st September 1939." *Combined Military Services Museum*, 21 July 2024, <https://cmsm.co.uk/operation-pied-piper-85-years-since-the-evacuation-of-britains-children-1st-september-1939>.
- Hume, Kathlyn. *Fantasy and Mimesis (Routledge Revivals): Responses to Reality in Western Literature*. Kindle ed., Routledge, 2014.
- Huxford, Grace. "Child Evacuees in the Second World War: Operation Pied Piper at 80." *History of government*, 30 Aug. 2019, <https://history.blog.gov.uk/2019/08/30/child-evacuees-in-the-second-world-war-operation-pied-piper-at-80/>. GOV. UK blogs.
- Irwin, William Robert. *The Game of the Impossible: A Rhetoric of Fantasy*. University of Illinois Press, 1976.
- Jackson, Rosemary. *Fantasy: The Literature of Subversion (New Accents) (English Edition)*. Kindle ed., Routledge, 2008.
- Lancelyn Green, Roger, and Walter Hooper. *C. S. Lewis: A Biography (English Edition)*. Kindle ed., HarperCollins Publishers, 2012.
- Lewis, C. S. *The Chronicles of Narnia*. HarperCollins Publishers, 2001.
- . "It All Began with A Picture . . ." *Of Other Worlds: Essays and Stories*. HarperOne, 2017, pp.67-68.
- . *Letters of C. S. Lewis*. Edited by W. H. Lewis and Walter Hooper. HarperOne, 2017.
- "Other World, N. & Adj." *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, September 2023, <https://doi.org/10.1093/OED/1085137197>.
- Pavlik, Anthony. "Being There: The Spatiality of 'Other World' Fantasy Fiction." *International Research in Children's Literature*, vol. 4, no.2, 5 Dec. 2011, <https://doi.org/10.3366/ircl.2011.0029>.
- Schakel, Peter J. *The way into Narnia : a reader's guide*. William B. Eerdmans Pub. Company, 2005.
- 川端有子「第二次世界大戦中のイギリスの集団学童疎開と児童文学への展開」『日本女子大学大学院紀要 家政学 研究科・人間生活研究科』日本女子大学大学院、第28号、2022年、pp. 243-250。